

文化財情報マッピングと地域歴史文化財防災の可能性

近藤無滴¹ 後藤 真²

概要：日本列島に頻発する自然災害によって、多くの歴史資料・文化財が危機に瀕している。それに対応して複数の文化財レスキューが行われるなど、自然災害から文化財を守る対策も進みつつある。これらの活動に加えて、文化財防災の事前対策も重要である。そのためには、まず基礎的な情報集積と文化財がある場所の災害の危険度をはかる必要がある。これらの対応のためには GIS をはじめとする複数の情報技術応用が求められる。あわせて文化財に関する位置情報を含む定点観測は、その日常的な危機をも把握し、喪失を防ぐ効果ももつことになる。文化財の位置情報を中心とするデータ蓄積について、京都の地域文化財である「お地蔵さん」を中心に事例を説明し、GIS 解析の結果と今後の可能性について述べる。

キーワード：歴史資料保全、デジタルアーカイブ、GIS、お地蔵さん、文化財防災

The Possibility of Cultural Property Mapping and Cultural Heritage Disaster Risk Mitigation

MUTEKI KONDO^{†1} MAKOTO GOTO^{†2}

1. はじめに

本発表は、筆者らが 2012 年から行っている「お地蔵さん」の調査（以降、地蔵調査）の成果をもとに、文化財防災の可能性とそのためのデジタルアーカイブのありようについて述べるものである。

筆者らは、これまで京都市内に点在する「お地蔵さん」を調査対象として、現地踏査による所在調査と、「お地蔵さん」に関する聞き取りを行った。この調査結果をもとに、調査カードを作成、緯度経度を付与し、GIS を用いて分布図を作成した。そして、その結果をもとに世帯数や人口などの状況を合わせてマッピングすることで、その傾向を探った。本調査の特徴は、町単位ではなく京都市という広い範囲で調査を行い、その上で町ごとの比較を行うことで、世帯数や人口、あるいは子供の数による「お地蔵さん」有無、町ごとの数の違いを検証したことにある[1]。その結果、一般的によく言われる世帯数や人口といった、「お地蔵さん」を維持管理する担い手の消失が「お地蔵さん」の状況に大きな影響を及ぼさないであろうことが判明した。むしろ、都市化による建て替えや道路の拡張などが、「お地蔵さん」の数が減少する原因としては大きいというのが、筆者らの現調査段階における見立てである。

前回の報告では地理情報を付与しつつ、総体的な調査を行うことで、建て替えや道路の拡張といった時間の経過による「お地蔵さん」の移動について検証した。

その後、2018 年 6 月 18 日には大阪北部を震源として大阪

北部地震が発生した。その後も、同年 9 月には台風 21 号、および豪雨が発生している。これらの災害により、町内の「お地蔵さん」あるいは祠が被害を受け、別の場所に移動されていることが考えられた。そこで、筆者らは以前の分布データをもとに現地を再踏査した。この詳細については 2 章で再整理するが、この再踏査の結果、今回の災害そのものでは大きな消失、移動は確認されたなかったものの、経年変化による移動自体は確認された。ここからは継続的な所在調査とデータそのもののアーカイブの重要性が指摘されると考えている [2]。

これらの成果を踏まえ、本発表では、さらに道路の拡張、建物の建て替え等、日常的な時間の経過・都市開発による周辺環境の変化が「お地蔵さん」の移動や撤去に影響するのかを検証する。

2. 災害による「お地蔵さん」移動の可能性

今回の調査について述べる前に、前回実施した調査の概要を述べる。前回の報告以前に実施した調査および検証については、過去の報告を参照して欲しい[1]。

前述したとおり、前回は都市化による建て替えや道路の拡張等、時間の経過による周辺環境の変化が「お地蔵さん」を消失・移動させる要因として大変に大きなものであることが、判明した。

その後、2018 年 6 月 18 日に大阪北部を震源として発生した大阪北部地震や、同年 9 月に発生した台風 21 号およ

1 京都国立博物館
Kyoto National Museum, Kyoto, 605-0931 Japan
2 国立歴史民俗博物館

National Museum of Japanese History, Chiba, 285-8502 Japan

び豪雨が発生した。これらの自然災害によって、「お地蔵さん」あるいは道路や被害に被害を与え、移動もしくは撤去された「お地蔵さん」があるのではないかと考えた。かつての状況に比して、文化財の所在データが災害時の資料保全に対して大きな意義を持つとの理解が広まったことも相まって、災害と文化財所在情報の関係性を再度整理することも重要な意味があるという視点もある。

災害の影響による「お地蔵さん」の消失移動の有無を検証するため、下京区約 270 か所、東山区訳 280 か所を再調査した。結果、約 50 箇所の「お地蔵さん」が過去の調査で確認した場所から移動されていた。例えば、2013 年の調査で発見した「お地蔵さん」が 2019 年の再調査では建物の建て替えにより撤去されていた (図 1) (図 2)。このような



図 1 2013 年の様子

結果は、必ずしも災害による影響を示唆するものではな



図 2 2019 年の様子

った。結果的には、災害という「特殊時」の状況については、見えることがなかったが、日常時における変化を追いかけることはできた。そこで、2019 年段階における日常変化を改めて追いかける可能性を検討した。この可能性の結果が本報告である。

3. 日常時における資料消失の可能性を改めて考える

最初の仮説として、近年京都で話題となっている、宿泊

施設の建設を可能性として検討することにした。近年の京都における最も大規模な開発は、宿泊施設の「建設ラッシュ」であると考えたためである。この開発によって「お地蔵さん」の移動あるいは撤去への影響があると仮説を立てた。その上で、実際のマッピングデータをもとに、比較・分析を行った。手順は以下の通りである。

まず、過去の「地蔵調査」の結果として「お地蔵さん」を発見した下京区 171 か所、中京区 145 か所、東山区 278 か所について新たにマッピングを行なった。そして、下京区と中京区、東山区に建設された宿泊施設の情報を重ね合わせることにした。宿泊施設の一覧については京都市オープンデータポータルサイトにある「旅館業法に基づく許可施設一覧」を利用した (<https://data.city.kyoto.lg.jp/node/14909>)。

このオープンデータでは、旅館業法に基づく許可施設の一覧が公開されており、一覧に記載されている施設名および住所まで公開されている。そのためこの住所データを活用し、緯度経度のデータを付与、csv ファイルを作成、地理院地図でマッピングを行った。なお、マッピングに際しては、過去の調査が行われた以降に認可された施設を対象とするとともに、大規模な開発をとまなわないと思われる、ゲストハウスのような簡易宿所は対象外とした。対象となった宿泊施設数は下京区 60 か所、中京区 103 か所、東山区 23 か所である。

「お地蔵さん」の位置情報と、調査日以降に建設された宿泊施設の位置情報を用い、両者の重ね合わせを行なった (図 3)。これにより、同じ位置、あるいは隣接している場所を地図上で確認し、「お地蔵さん」の移動・消失可能性を検討することとした。この手法は、地域文化財の保全に歴史資料データマッピングが可能となるという点でも汎用性が高く、その具体的な例となることを目指したためでもある。

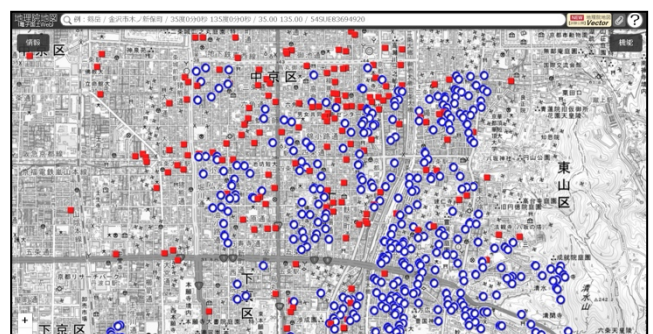


図 3 赤が宿泊施設、青が「お地蔵さん」の位置

4. 調査結果と考察

本結果については、現時点では、「お地蔵さん」と宿泊施

設の場所が重ならないことがわかった。つまり、「お地藏さん」がある場所で、宿泊施設は新しく建設されていないということである。一部、隣接していた建物や空き地が宿泊施設になっている場所はあったが(図4)、「お地藏さん」

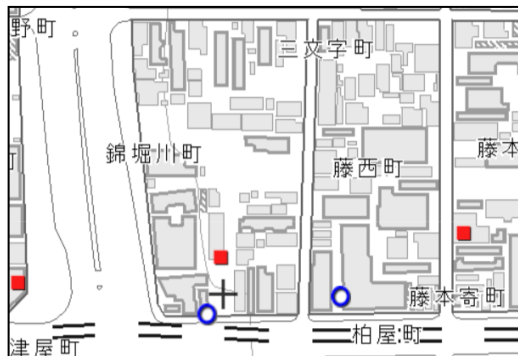


図4 「お地藏さん」に隣接して宿泊施設が建設された例



図5 対象地域の2012年の様子



図6 2019年末の様子

の移動および撤去を伴うものではなかった(図5)(図6)。このことは単に偶然である可能性も多分にあるものの、一方で下記のような可能性も推測できる。

1. そもそも「お地藏さん」が残っているような地域が

全体として開発対象外である。

2. 「お地藏さん」があるような町ないし、建物近辺は宿泊施設建設の場として避けられている

1は現時点のマッピングを見る上では、考えにくい。事実、図4のような隣接事例も複数存在すること、対象とした3区は全体としても宿泊施設のニーズが高い地域でもあるこの点からも、全体として対象外と見ることはできないであろう。



図7 2013年におけるA地域の「お地藏さん」



図8 2019年におけるA地域の「お地藏さん」

2については、可能性を考慮しておくべきではないだろうか。特に「お地藏さん」がある場所は、その前で「地藏盆」を行う場でもある。その場を維持するように、町の方で建設等に対して何らかのアクションを起こしたり、建設場所の選定でも何らかの影響を及ぼしている可能性も、ゼロではないと言える。地域の中において、商業施設と地域住民の適切な関係構築の一部が、この結果からは垣間見えるのかもしれない。

また、これらの文化財マップ等が可視化されれば、京都だけではなく、他の地域においても開発と文化の関係についても新たな可能性を導き出すのではないかと考える。



図9 2020年におけるA地域の「お地蔵さん」のあった場所

この調査では、合わせて実際の地域文化財消失の事例が確認された。これは前回の報告段階でも、「お地蔵さん」が消失し、台座だけになってしまっていた箇所である(図7)(図8)。

宿泊施設の実態調査を確認する上で、さらに本地域を確認したところ、台座ごと消失し、全てなくなってしまうことがわかった(図9)。

背後にある建造物全体が撤去され、駐車場になっている。これにもない、全てが撤去されたものと考えられる。この町における「お地蔵さん」の位置を再度踏査したものの、該当するものは発見できなかった。現時点では、どこかの寺院に寄託されたのか、どこかの自宅なりの敷地内に入ってしまったのかなどはわかっていない。この点からは、通常の小さな建造物の変化が、お地蔵さんの移動・消失に大きな影響を及ぼしていることがわかる。大規模開発もさることながら、小規模な変化が日々文化財の状況変化に大きな影響を及ぼしている可能性があると言えるであろう。

5. 結論と課題

現時点では、文化財の消失を継続的に見ていくなれば、やはり日常、かつ小規模な開発が大きな影響を与えていると考えられる。この小規模な開発の原因となっている社会的要因として、高齢化や住む人がいなくなる状況があるのか、それらは今後の課題と言える。

このような「お地蔵さん」が移動、撤去される要因をさらに突き止めるためには、さらに継続的な調査が必要であり、日常的な記録が重要であると思われる。

言い換えれば、このような文化財情報のマッピングは、地域資料・文化財の状況を把握する基礎資料として極めて重要であることがわかる。このような情報の蓄積があることで、初めて「資料がなくなる要因」を理解する材料を得ることができるとも言える。これまで、大規模な災害に対

して、文化財マッピングの重要性は指摘されてきたが、このような例を見る限り、日常の喪失に対しても、重要な機能を持つと言えるのではないだろうか。さらにこれらのデータを蓄積し、情報学的にはマクロな視点を獲得することで、ミクロな理解をうまく呼応しつつ、全体として文化財や歴史資料の保全を可能にすることが肝要である。

6. おわりに

地域の文化財・歴史資料はその保全と活用の必要性が指摘され久しい。そしてそれらの課題は、個別の事例や経験に即したものが多かった。その意義自体は極めて重要であるものの一方で、全体としてどのように理解されるべきなのか、ということも重要である。そのような全体の視点を取り入れるためには、地域の文化財の数、位置、状態を把握することが必要である。そのために、日常的な文化財の現状記録とマッピング等による可視化が強く求められる。

本発表が、地域の文化財防災に文化財情報マッピングに有用である事例となることを願い、本稿を閉じる。

参考文献

- 1) 近藤無滴, 他. 時空間情報を用いた京都における「お地蔵さん」・地蔵盆の分析, 情報処理学会研究報告. 2014, vol. 102, no. 8, https://ipsj.ixsq.nii.ac.jp/ej/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=101447&item_no=1&page_id=13&block_id=8, (参照 2019-12-27).
- 2) 近藤無滴, 後藤真. デジタルアーカイブ所在調査による文化財防災の可能性: 「お地蔵さん」の所在調査を例として. デジタルアーカイブ学会誌. 2019, Vol3, no 2, https://www.jstage.jst.go.jp/article/jsda/3/2/3_95/_pdf/-char/ja, (参照 2019-12-27).

謝辞: 本研究は JSPS 科研費 JP19H05457, JP17H00773 の助成を受けたものである。また当初の大規模な調査において、大きな役割を果たした師茂樹先生をはじめ、花園大学の文化遺産学科(当時)の皆様には厚く御礼を申し上げる。